

《研究ノート》

専修大学における日本語教育実習の 新たな展開に向けて

備 前 徹*・三 枝 令 子**

1. はじめに

専修大学文学部日本語学科では2002年度から日本語教育実習を授業科目として設置している（当時は、文学部国文学科）。現在の日本語教育実習には、国内で実習する「日本語教実習 A」と、海外で実習を行う「日本語教育実習 B」「日本語教育実習 C」がある。

「日本語教育実習 A」は、本稿の筆者の一人である三枝が着任する以前は、日本語クラスの授業見学は行っていたが、実習先の確保が難しく、教壇実習は行っていなかった。ここでは、専修大学国際交流センター^{注1}の協力によって教壇実習が行えるようになった2017年度からの2年間の「日本語教育実習 A」と、2005年度以降韓国の湖南大學校を教壇実習の場としてきた「日本語教育実習 B」を取り上げる。「日本語教育実習 C」については、すでに王（2014）に報告がある。「日本語教育実習 C」は、協定校であるアメリカのオレゴン大学で2007年度に始まったが2015年度に終了し、2016年度からは、カナダのカルガリー大学で行われている。

今後、日本語学科のカリキュラムは、学科改編によって変更される可能性が高い。そこでこれまでの日本語教育実習の実情をまとめ、記録に残す

* 専修大学文学部教授 ** 専修大学文学部特任教授

ことで、今後の改革への一つの資料としたい。

2. 日本語教育実習の目的

この授業の受講生は日本語教師になることを希望しているものが少なくないが、全員が日本語教師を目指しているわけではない。一方、国語科の教員になる学生は数名存在する。また、受講生の中には、日本語非母語話者学生、つまり外国人留学生がいる。こうした受講生の構成から、この授業の狙いは、次のような点にあると言える。

- 1) 日本語を客観的にとらえる視点を養う。
- 2) 日本語教育について、知識に加え、実践的に知る。
- 3) 日本の学校においても、外国人児童が増加している現在、彼らへの対応の仕方（わかる説明、わかったかどうかの確認法）を身につける。
- 4) 日本語実習に当たって、日本人と外国人とが共同して作業する経験を通して、それぞれの存在の意味を知る。
- 5) これからの社会は、外国人との接触が増加していくことは間違いなく、そうした中、日本語を客観的に把握するとともに、外国人の立場にたった思考のあり方に配慮する視点を持ち、日本語非母語話者とコミュニケーションする能力を身につける。

日本語教育においては、教師の免許制度はなく、法律で定められた教員養成課程は存在しない。しかし、実習では教壇実習が欠かせない。この実習の場の確保が教育実習の授業においては大きな問題となる。

3. 国内での日本語教育実習（日本語教育実習 A）について

3.1 概要

- 1) 履修登録者数 2017年度28名, 2018年度33名
- 2) 通年科目（計30回）
- 3) 年間の授業の大まかな流れ

日本語教育の概要講義 →教材分析 →授業見学 →教案作成
→教壇実習 →授業報告 →評価 →社会の中での日本語教育の役割

上記の授業内容は、文化庁（2018）があげる教育実習の指導項目（オリエンテーション, 授業見学, 授業準備（教案・教材作成等）, 模擬授業, 教壇実習, 教育実習全体の振り返り）をすべて含んでいる。

日本語教育実習 A では、はじめに日本語教育について教師が概括するが、その後は、講義と実習（課題に向けての作業）とを並行して行う。以下、上の授業の流れのそれぞれについて少し詳しく説明する。

3.2 日本語教育の概要講義内容

- 1) 教育の理念（目的, 国語教育との違い, 対象, ニーズ分析, シラバス, コースデザイン）
- 2) 授業技術（指名の仕方, 板書の仕方, 学習者の様々な誤り, 誤りの訂正法など）
- 3) 日本語の 4 技能, 話す, 書く, 読む, 聞く, の扱い。漢字の扱い方。
- 4) 学習段階別教育の方法（中上級の日本語）
- 5) 日本語教育における評価の目的とその有用性, 評価の種類, クイズ・テスト作成上の留意点, 結果の分析法

- 6) 日本語教育と社会のかかわり（日本語教育が必要とされるのはどういう場合、その場合、対象者にどう対応したらいいか）

3.3 教材分析

- 1) 教授項目の分析。具体的には、動詞、形容詞の活用、助詞、存在文、やりもらい、複文等を取り上げて、文法ルールを考える。（たとえば、動詞のテ形はどのようなルールで作られているか。）
- 2) もっともよく使われている日本語教科書『みんなの日本語』をもとに、目次、各課の構成を分析する。
- 3) 各課の練習の流れを考える。
- 4) 実際の教案を一つのモデルとして配布したのち、以下のテキストの課について文型導入の教案を作成する。

一回目『みんなの日本語』2課

二回目『みんなの日本語』22課

三回目『みんなの日本語』26課「んです」の導入と練習

3.4 授業見学（授業ビデオの視聴と実際の授業見学）

- 1) ネットにアップされている授業ビデオからいくつか適当と思われるものを選んで視聴し、実際の授業がどのようなものかを知る。感想を述べあう。
- 2) 専修大学国際交流センターの授業見学。最低二回見学することを課した。そのうちの一回はセンターのクラスビジター制度を利用した。クラスビジター制度では、学生は授業の初めから参加するのではなく、導入が終わった授業に入り練習を手伝う。また、授業見学では、各自が教壇実習するクラスを見学し、見学後、見学記録を提出する。授業では、その報告をもとに授業の運営方法についてクラス全体で話し合う。クラスの授業内容、学習者のレベル、教師と学習者の発話時間、コミュニケー

ションの取り方、いいと思った点、よくないと思った点、疑問点等。

3.5 教壇実習

教壇実習は、上記の3.4のクラスの見学から準備が始まっていると言えるが、その後、教案作成、実習、報告書の提出が一つのルーティンとなる。

1) 概要

国際交流センター秋コースの授業（正規外）を3人から4人の学生が1グループとなって、1コマ担当する。すなわち、グループ単位ではあるが、全員が必ず1コマの教壇実習を担当する。

1年目は、各コースの授業時間外に、各1コマを2週にわたって教壇実習にあてた。1年目にやってみてもっとも問題になったのは、実習の授業を受ける留学生の確保であった。授業時間外であること（センターの日本語授業は午前中にすべて終わるが、教壇実習は履修者全員が可能な午後4時半開始にしたため）、また、1週目に授業の様子がわかったためか、2週目は教壇実習に来る留学生が減った。2年目は、1年目の結果を踏まえ、実習授業を土曜日の午前中にし、かつ、教壇実習を2週に渡らせず1回（一日）で終わるように、2コマ続きの授業とした。しかし、こうした対策をとったにも関わらず、参加留学生の遅刻、欠席は多かった。

2) 教案作成

センターの授業進捗スケジュールと見学の経験をもとに、各グループで、学習者に合った教材、学習活動を考える。3週間をその準備にあて、2週目に最初の授業案を全員で検討する。3週目にその改良版を提出する。グループの中には、留学生が入るものもある。1年目の履修者の感想に、留学生との共同作業は意味がなかったというコメントがあった。こうしたコメントを出させた反省に立ち、2年目は、非母語話者が教える場合と母語

話者が教える場合の違い、それぞれの意義を授業で考えるようにした。

- 1 外国人教師は、自分の経験から、学習者の抱える問題が理解しやすい。
- 2 学習者にとっては、出身が同じであることの安心感と葛藤がある。
- 3 日本人教師は、日本語の内観判断が迅速的確にできる。

海外の日本語教育では、非母語話者の日本語教師が普通であること、そのレベルが非常に高いことを強調した。

3) 授業報告

実際の授業報告書を一つのモデルとして配布する。1年目の履修者は、教壇実習の報告をグループ単位で作成、提出し、授業で発表し、全員で検討した。2年目は、教壇実習の様子を各クラスともビデオカメラに録画したので、1グループ一つの報告書とともに、録画した一部を授業の振り返りに使うことが可能になった。1回目は口頭で各授業についてのコメントを求めたが、批判することをためらうのか意見が出にくかった。そのため、2回目は書いて提出することにした。

3.6 評価

- 1) 日本語教育の授業における評価：「みんなの日本語」で教案を考えた課について、クイズを作成し、提出する。作成したクイズを全員で検討する。

以下の内容は、講義として扱った。

- 2) 評価の目的、テストの信頼性と妥当性、クイズ・テストの作り方
- 3) 日本語の大規模試験：日本語能力試験の現状と今後の課題について
- 4) Can-do の考え方
- 5) さまざまな試験のあり方：PISA、資格試験、入学試験、国家試験

3.7 社会の中での日本語教育の役割

授業での実習は、大学における日本語コースで行うが、日本語教育の現場はそれに限らない。どのような現場が現実にはあり、そこではどのような対応が求められるかを考える。

3.8 国内実習の今後の課題

国内実習と海外実習の利点、違いは次の点にあると考えられる。

	国内実習	海外実習
実習を受ける留学生の日本語を使う機会	多い	少ない
日本、日本語に関する情報	手に入りやすい	入りにくい
受講生の費用	高い	安い
受講生の異文化との接触体験	薄い	濃い

国内実習は、費用がかからないという点が、最大のメリットだろう。専修大学の国内で行う日本語教育実習の問題点としては、以下の点があげられる。

- 1) 教壇実習時間が少ない。3 人ないし 4 人で 50 分授業 1 コマは実習時間として十分ではない。

これを補うものとして、授業時間内の模擬授業を今より増やすことを考えたい。

- 2) 学生の授業を受けてくれる外国人留学生の確保が難しい。これまで 2 年間、国際交流センターの外国人留学生にはボランティアとして課外授業に参加してもらったが、アルバイトとして参加してもらうことを考えた方がいいかもしれない。

- 3) 学生は、教壇実習前に担当するクラスの見学を最低 1 コマ行うが、受講生の日本語レベルや授業の進み具合を把握するには十分とは言えない。しかし、学生自身のほかの履修科目との兼ね合いがあり、学期内に集中した見学時間の確保は難しい。

- 4) 教案を作成するためには、参考資料として、授業で使用している教材のほかに、それに付随する副教材、その他の教材、辞書、文法書などが必要である。現在、そうした資料を常時設置し、学生が自由に使える空間がない。

授業開始段階では、学生は、日本語の授業に具体的なイメージを持っていない。しかし、教壇実習に向けて準備をするようになると、少し真剣さが増し、実際にやってみた後では、日本語教育に対するイメージが変わり、より現実味を帯びたものになる。日本語教育を考えるうえで、実際の現場に立つ経験を持つことは大きな意味がある。準備期間も含めて、上にあげた問題点を解決しつつ、教壇実習の内容をいかに充実させるかが今後の課題である。

4. 海外での日本語教育実習（日本語教育実習 B） について —湖南大学校—

文学部日本語学科では、日本語教育実習の場としての提供を韓国の湖南大学校人文教育大學日本語学科（現 湖南大学校人文社会大學日本語学科、以下湖南大学と呼ぶ）に依頼し、2004年度に試験的に実施したのを皮切りに、翌2005年度から正式な専門科目として日本語教育実習を実施してきた。専門科目としての「日本語教育実習」は2002年度に設置されたが、本格的な教壇実習を伴うものではなく、2005年度に新たな本格的な教育実習科目を設置するにあたり、それまでの日本語教育実習科目と区別するために、湖南大学を教壇実習の場とする授業の名称を「日本語教育実習 B」に変更した。その後、専修大学文学部と湖南大学校人文社会大学との間に組織間協定が結ばれたことにより、「日本語教育実習 B」は2007年度から両大学日本語学科の交流の一環としての位置づけを以て実施されることになった。また、2012年度からは（独）国際交流基金の「海外日本語教育インターン

派遣プログラム」に採択され、国際交流基金がこのプログラムを終了する2016年度まで補助金を受けた。

その後、昨年度まで十年以上の実施期間を経た後、湖南大学が日本語学科の学生募集を停止することになったため、この大学での日本語教育実習は2017年度で終了し、2018年度からは慶熙大に実習の場を移すことになった。

ここでは、2017年度までの湖南大学での日本語教育実習を振り返りつつその成果をまとめておく。

4.1 履修者数

湖南大学で日本語教育実習を行う授業科目「日本語教育実習 B」の2005年度以降の履修登録者数は下記のとおりである。なお、これらは正式な履修登録者の数であり、年度によってはこれ以外に実習に参加した学生が若干名いる（大学院生や複数年度の参加者など）。

表1 「日本語教育実習 B」履修者

2005（平成17）年度	4名
2006（平成18）年度	5名
2007（平成19）年度	7名
2008（平成20）年度	5名
2009（平成21）年度	8名
2010（平成22）年度	1名（※）
2011（平成23）年度	6名
2012（平成24）年度	6名
2013（平成25）年度	6名
2014（平成26）年度	4名
2015（平成27）年度	2名
2016（平成28）年度	3名
2017（平成29）年度	3名（※）

（※）2010（平成22）年度と2017（平成29）年度は高橋雄一氏が引率他の年度は筆者（備前）が引率

「日本語教育実習 B」の履修に際しては、原則として「日本語教授法」「日本語教材研究」など、日本語教育に関わる専門科目を前年度までに履修済みであることを条件とし、履修希望者が多い場合にはこれを参加人数絞り込みの手がかりの一つとした。

4.2 年間計画と実習の日程

「日本語教育実習 B」は、4月から夏休みまでの前期授業では湖南大学で使用している日本語の教科書の分析（語彙・文法項目など）と各課の教案作成に多くの時間を費やし、また、実際に授業を担当する場合に必要な配付資料（小テスト、文法説明用の資料など）や文字カードなども作成した。

湖南大学の学事暦では、後期の授業が8月最終週または9月第1週の月曜日に始まるため、ほとんどの年度でそれに最も近い土曜日に成田を発ち、ソウル市内で一泊した後、日曜日に鉄道で光州市に向かうというスケジュールをとった年度が多い。

例として2008年度と2010年度の湖南大学での実習スケジュールを以下に示す。

表2 2008年度実習スケジュール

実 習 日	内 容
9 / 8 (月)	4 限中級会話・5 限中級会話
／ 9 (火)	1 限初級会話・3 限初級会話
／11 (木)	4 限中級会話・5 限中級会話
／12 (金)	1 限初級会話・3 限初級会話
／16 (火)	1 限初級会話・3 限初級会話

表3 2010年度実習スケジュール

実 習 日	内 容
9 / 7 (火)	4 限初級会話
／ 9 (木)	1 限中級会話・5 限中級会話

／10（金）	3 限初級会話・4 限初級会話
／13（月）	1 限中級会話・5 限中級会話
／14（火）	3 限初級会話・4 限初級会話
／16（木）	5 限中級会話

実習参加学生は二人乃至三人でチームを組み、各チームがそれぞれ湖南大学の一人の日本語教員に貼付いて実習を行った年度もあったが、時間割の関係で、一人の実習参加学生が複数の教員の授業で実習を行った年度もある。ただし、そのような場合も実習参加学生が担当する教壇実習の時間数がほぼ等しくなるようにすることを念頭に置いた。一人の実習参加学生が上記の全ての授業で教壇実習を行ったわけではない。

4.3 実習内容について

湖南大学で使用されていた日本語の教科書は下記のとおりである。

表4 年ごとの使用教科書

2004年度	初級：『多楽園日本語会話初級』 中級：『多楽園日本語会話』『みんなの日本語』 上級：『多楽園日本語会話フリートートキング』
2005年度～ 2006年度	初級：『みんなの日本語』 中級：『みんなの日本語』
2007年度	初級：『会話日本語』（회화 일본어）シリーズ、『スタート日本語』（스타트 일본어）シリーズ 中級：『会話日本語』（회화 일본어）シリーズ、『スタート日本語』（스타트 일본어）シリーズ
2008年度	初級：『こんにちは日本語』 中級：『新概念日本語フリートートキング』
2009年度	初級：『こんにちは日本語』 中級：『こんにちは日本語』
2010年度～ 2017年度	初級：『みんなの日本語』 中級：『みんなの日本語』

実習開始当初は湖南大学では韓国で出版されている教科書が使われていたが、本学の教育実習への配慮からか、2010年度以降は『みんなの日本語』

が使われることになり、教科書の入手が容易になった。

湖南大学の授業進度は、当然のことながら毎年度ほぼ同じであり、実習で担当することになる課は、初級会話では『みんなの日本語 初級Ⅰ』の13課～14課、中級会話では『みんなの日本語 初級Ⅱ』の39課～40課であることが多かった。

それぞれの課の文型と『みんなの日本語 教え方の手引き』掲載の各課の「言語行動目標」を引用すると以下のようである。

13課

1. わたしは パソコンが 欲しいです。
2. わたしは てんぷらを 食べたいです。
3. わたしは フランスへ 料理を 習いに 行きます。

言語行動目標：手に入れたいと思うもの（物・人・時間など）やしたいことが言える。
移動（「行く・来る」など）の目的が伝えられる。

14課

1. ちょっと 待って ください。
2. ミラーさんは 今 電話を かけて います。

言語行動目標：簡単な依頼、指示、申し出ができ、また、それに答えることができる。
今、何をしているのかが言える。

39課

1. ニュースを 聞いて、びっくりしました。
2. 地震で ビルが 倒れました。
3. 体の 調子が 悪いので、病院へ 行きます。

言語行動目標：ある事柄によって生じた感情または事態を、「～で／で」を用いてその原因とともに表現することがで

きる。

出来事を原因（自然災害、事故など）とともに描写することができる。

「～ので」を用いて、丁寧に理由を述べたり、弁解したり、事情を説明したりすることができる。

40課

1. JL107便は 何時に 到着するか、 調べて ください。
2. 台風 9 号は 東京へ 来るか どうか、 まだ わかりません。
3. 宇宙から 地球を 見て みたいです。

言語行動目標：疑問文を文の一部に組み込んで、疑問に思っていることが明確に述べられる。

試しにやってみることが言える。

実習参加学生の準備状況を振り返ると、実習開始当初の頃は、教材や教具として文字カード、絵カードを多用する例が多かったが、年度の経過とともに湖南大学の教室設備も進化し、教壇実習でパソコンを用いて pdf ファイルやパワーポイントを利用する割合が高まっていたことが目立つ。パソコンが使える環境が整ってくると、単純なパターン練習など、文字カードなどを利用した方が効率がいいと思われるところにまでパソコンを使おうとする姿勢が実習参加者に見られるようになり、これは帰国後の検討に際して反省点として挙げられることにもつながった。

実習の様子は、2007年度以降、実習参加学生が交代ですべてビデオカメラで撮影し、帰国後、後期の「日本語教育実習 B」の授業では、1コマ75分の湖南大学の授業ビデオを2回に分けて批評の対象とし、教案と実際の授業とのズレなど授業の進め方について、教室内での実習生の立ち位置について、授業中の実習生の説明内容や話し方などについて、教材教具の使い方についてなど、授業全般について意見交換を行うことを主たる内容と

した。

この教育実習に参加する以前に国語の教育実習をすでに経験している実習参加学生もいたが、ほとんどの参加者は教壇に立つのが初めてであり、また、外国人に対する日本語教育はほぼ全ての参加者にとって初めての経験だったようである。そのため、後期の授業では反省すべき点を参加者同士で多々指摘し合うことになり、教壇実習の経験がその後の実習参加者に与えた影響は大きいものがあった。

4.4 実習参加学生に対する成績評価について

「日本語教育実習 B」の成績評価は、前期の準備状況を35%、湖南大学での教壇実習を30%、後期の反省状況を35%の各比率で行った。前後期については筆者（備前）が、湖南大学での教壇実習については湖南大学の日本語教員のかたがそれぞれ評価した。

4.5 宿泊施設について

湖南大学の日本語教育実習では、実習期間中は湖南大学のキャンパス内にある宿舎を利用する年度が多かったが、キャンパスからバスで30分ほど離れたところにある学生寮を利用した年度もある。ただし、協定締結校からの派遣者の宿泊費は無料とのことで、実習参加学生の経済的負担を少しでも抑えたい我々としてはありがたい待遇であった。

湖南大学のキャンパスは北側に山を控えた東西に長い敷地で、キャンパスの状況は <https://en.honam.ac.kr/CampusMap>（湖南大学キャンパスマップ）で確認できる。

実習授業はほぼ毎年度キャンパス内の東側の校舎内の教室で行ったが、宿泊場所は実習教室近くの宿舎を利用した年度と、一番西側の宿舎を利用した年度がある（2005年度から2006年度までは前者（筆者は学外宿舎）、2007年度は学外宿舎、2008年度から2010年度までは西側の宿舎、2011年度から

2017までは東側の宿舎であった)。東側の宿舎と実習を行った教室の建物は歩いて2～3分の距離だが、西側の宿舎からは徒歩で15分はかかる距離にあり、学内バスなどはないため、歩くしかない。

東側の宿舎は国際館という名称で、語学の外国人教員などが単身または家族で入居している建物であったが、この稿をなすにあたって改めて調べてみたところ、現在は「創造館」という名称に変わっている。

教育実習のために湖南大学を訪れた約10年の間にキャンパス内は次々に新しい建物が建てられ、また、正門前は、かつては水田が広がるばかりであったが、こちらも年ごとに様変わりして、現在ではマンションが幾棟も建ち並び、小中学校の他、商店や食堂なども数多くなり、その変わり方の大きさには毎年驚かされた。

4.6 ソウル市内の中学校と高校訪問、ソウル日本文化センター訪問について

湖南大学がある光州市はソウルから KTX（韓国高速鉄道）で約2時間半（2004年度）の距離にある。成田を朝発ち、その日のうちに光州までたどり着くのはややきついスケジュールであるため、往復ともソウル市内明洞地区の比較的安いホテルを利用した。これにより、成田を発った日の夜は、本学日本語学科の韓国人卒業生修了生と旧交を温める機会にもなったが、それだけでなく、以下のような機会にも恵まれた。

2013年度には、国際交流基金から、日本語の授業が行われているソウル市内の高等学校を訪問してみないかとの提案があり、9月11日に文貞女子高等学校と大東高等学校を訪問し、実習参加学生はそれぞれの高等学校の日本語の授業に参加し、教員のかたがたや生徒たちと交流する機会を持つことができた。

また、韓国の檀国大学日本語学科在学中に本学に特別聴講生として1年間在籍した安智勲氏が、日本語教員として津寛中学校（ソウル市恩平津寛

4 路)に当時勤務していたことから、2015年9月10日に筆者と実習参加学生でこの中学校を訪問し、日本語の授業に参加して生徒たちとの交流の場を持つことになった。

いずれの学校でも、生徒が一般の日本人と接する機会がほとんどないため、「生身の」日本人と接触する機会が持てたことに謝意が表された。

さらに、2016年度には、国際交流基金の勧めで9月9日にソウル日本文化センター(ソウル市新村)を訪問する機会を得て、韓国における日本語教育の現状と課題などについて詳細な説明と情報提供を受けることができた。

外国語としては当時すでに日本語よりも中国語の学習者のほうが多くなっており、外交関係が語学学習者数に直接影響していること、また、大学入試の外国語の試験では比較的容易な問題が出題されることから、アラビア語の学習者数が激増していることなど、興味深い情報を得ることができた。

4.7 その他

2008年度は9月13日から15日までは韓国の旧盆、チュソク(秋夕)の休日に当たっており、この期間は市内の商店はもとより大学内の食堂なども一切営業を停止することから、筆者(備前)たちの生活面を心配してくれた金太基氏(湖南大学日本語学科教員)が、氏の自家用車を使って釜山への旅行を企画してくれた。往復の行程のみならず、実習参加学生の分も含めた宿泊施設の予約や食事、釜山市内の観光の手配は、いずれも氏の個人的な厚意によるものであり、感謝の念に堪えない。

また、2009年度は、日本を含め世界各国でインフルエンザが流行した年で、湖南大学到着後、筆者(備前)らがインフルエンザに感染していないことがわかるまで湖南大学の学生との接触が禁止されるとともに宿舍の部屋からできるだけ出ないよう指示があり、実質的な実習期間を短縮せざる

を得なかった。

4.8 日本語教育実習を国外で行なう意義と課題

「日本語教育実習 B」のおもなねらいは以下の点である。

- 1) 日本語学科のカリキュラムで学んだ日本語及び日本語教育に関わる専門科目の知見を受入先の日本語の授業で実践することにより、日本語教育及び第二言語習得の研究が実践面とどのようにつながっているかを参加者に認識させること
- 2) 日本語教育の専門家を目指す際に、更にどのような勉学・研究が必要かを意識させ考える機会を提供すること

実習参加学生には湖南大学での実習直後に毎年レポートを書かせ、湖南大学の日本語教員のかたがたに、教壇実習と合わせて成績評価を依頼してきたが、それによれば、実習生からも、また実習を受入れる側からも、上記2点について満足できる結果が得られたと考えられる。また、（この実習には韓国人留学生の参加者もいたが）日本人学生には韓国語未習の学生も多く、日本に來たばかりの学習者の不安を実体験する機会にもなっており、国外で教育実習を行うことの付加価値は大きなものがある。

実習参加学生が作成したレポートによれば、自分たちが担当した日本語学習者の日本語運用力の伸びが想像以上に早いことを実感し、彼らがそれまでに受けてきた外国語の授業に改善すべき問題があったのではないかなど、日本における外国語教育のあり方を顧みるきっかけにもなっていたようである。さらに、海外での日本語教育実習を経験した参加者が、「コミュニケーション」「人間関係の構築の仕方」などに新たな問題意識を発見する例も多く見られた。

これまでの参加者のうちの多数が大学院に進学する、日本語教師になるなど、湖南大学での日本語教育実習は、参加学生の進路にも大きく影響を与えており、海外の日本語教育に従事したいと希望する者も少なくない。

また、湖南大学では、このプログラムを、学習者が日本語教員以外の日本人と交流できる貴重な機会として評価していた点も注目に値する。今後も日本語学習者の日本語力及び日本理解の向上に貢献することが期待されるプログラムでもあり、実習の場を慶熙大学に変えた2018年度以降も、日本語教育を考える上で貴重な機会ととらえることができる。

(本稿は、1～3章を三枝が、4章を備前が起稿し、話し合ってまとめたものである。)

注

- 1 「日本語教育実習 A」において授業見学、教壇実習を行っている専修大学の国際交流センターは、国際交流協定締結、学生の国際交流協定校等への留学派遣、海外からの教員・研究員の受け入れ、日本語・日本事情プログラムの運営等を行っている部署である。日本語プログラムは、日本語学習を希望する外国人のために行うもので、年に4コースが開設され、協定校以外にも広く学習者を受け入れている。

参考文献

- 王伸子2014「大学生のための海外における日本語教育実習について—オレゴン大学での実践と縦断的報告—」2014 CAJLE Annual Conference Proceedings
- 岡崎敏雄・岡崎眸1997)『日本語教育の実習 理論と実践』アルク
- 文化庁2018「『日本語教育人材の養成・研修の在り方について(報告)』について」
http://www.bunka.go.jp/koho_hodo_oshirase/hodohappyo/1401908.html (最終アクセス日: 2018.12.09)